# モンゴル国小学校における音楽の授業（２）

石井　哲夫

# Music Classes of Elementary School in Mongolia (2)

Tetsuo ISHII

E-mail: tishii@edu.u-toyama.ac.jp

**Abstract**

These examples are music classes of Elementary School of Ulan Bator and Choibalsan in Mongolia. The elements of national music are adopted in these Classes. In Choibalsan , those are not only Mongolian Folk Song but also Buryat's song. We ought to learn from them in Musical education in Japan.

**キーワード**：モンゴル，小学校，音楽教育，民族音楽
**keywords**：Mongolia, elementary school, musical education, national music

## １．はじめに～前回の調査行における問題点

表題に示した研究・調査のため，2014年にモンゴル国へ赴き，同国の小学校における音楽の授業の実際についての資料収集を行なった。しかし前回（2014年）の調査では以下の問題があった。

ｉ）限られた日程の中では面積約156万平方kmの国土を持つ同国の内，調査に赴くことができた地域が首都から半径50km以内の２つの町村のみであったこと。

ii）同国の首都地域の学校における調査は行なっていないこと[*1]。

以上のことから今回（2016年）の調査行[*2]では，地方都市の学校と首都の学校に焦点を当てることとした。今回，音楽の授業の参観の許可が取れたのは，ドルノド県第12学校（チョイバルサン市）とウランバートル第28学校である。

## ２．ドルノド県第12学校における音楽の授業

ドルノド県（Дорнод，Dornod）は首都ウランバートルの東600kmに位置するアイマク（「県」と訳される）であり，県庁所在地はチョイバルサン市（Чойбалсан，Choibalsan）である（図1）。東へ100kmほどで中華人民共和国内モンゴル自治区，北へ200kmほどでロシアである（首都よりも隣接国の方が近い）。近辺にウラン鉱山がありモンゴル

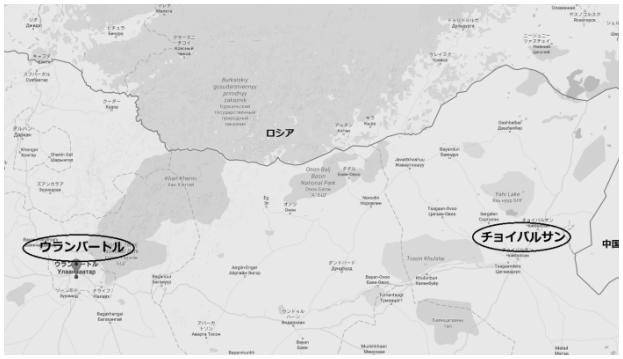


図 1. 首都ウランバートルとドルノド県の位置

人民共和国（旧ソビエト連邦支配）時代には，ウラン採掘，ソ連への輸送で経済的に潤った都市である。ソ連支配から独立した現在も町づくりや交通網にはロシアの影響が強く残り首都ウランバートルとのつながりより強い部分が残っている[*3]。人口は３万8150人（2008年）とモンゴル国内第４の規模であるが，居住者はハルハ族（モンゴル人の最多数民族）の他，バルガ族（モンゴル民族ではあるが現在はほとんどが内モンゴル自治区に居住），ブリヤート人（ブリヤート共和国はロシア連邦に属する共和国であるがブリヤート人はモンゴル系民族である）が居住する。

また今回訪問したドルノド県第12学校（図２）はドルノド県の音楽教育推進校となっており，音楽の授業（音楽活動）を行なうための設備は充実している（図３）。

図４は５年生の器楽（リコーダー）の授業の様

図 2. ドルノド県第12学校

図 3. 第12学校の音楽室

図 4. 第12学校 5 年生リコーダーの授業

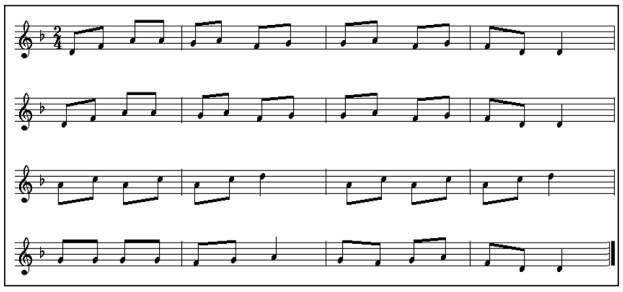

図 5．授業で使用されたブリヤートの歌

子。CDEFGAHC の指使いは一通り学習した後であり，板書された音符を教師が指し示し，その音を出してみる練習。これをやりながら実際の楽曲を演奏してみるという内容であった。このときに使用された楽曲はブリヤートの歌（図 5，筆者による採譜）。

この授業を担当した音楽教諭は元々馬頭琴の奏者・指導者であり，授業間の休憩時間には子供たちのリクエストに応えて演奏する（図 6）。

図 6. 馬頭琴を演奏するドルノド県第12学校の
オユンビレグ音楽担当教諭

## 3．ウランバートル第28学校における音楽の授業

ウランバートル第28学校（図 7）は，ウランバートル中心部より北へ寄った位置の住宅地と商業地域が混在する場所にある。この学校も 1 つの校舎を小学校，中学校，高等学校が共有して使用している。

格別に音楽教育推進校というわけではないが音楽の授業のための専用教室（音楽室）は設置されている。但し授業で使用されないときはホームルームとして使用される（図 8）

音楽室の入口にはモンゴル民謡の楽譜が壁画のように掲示されている（図 9）

図10は 4 年生の鑑賞の授業の様子。音楽を聴き，感じ取ったことを身体で表現したり絵に描いたりす

図 7. ウランバートル第28学校

図 8. ウランバートル第28学校の音楽室

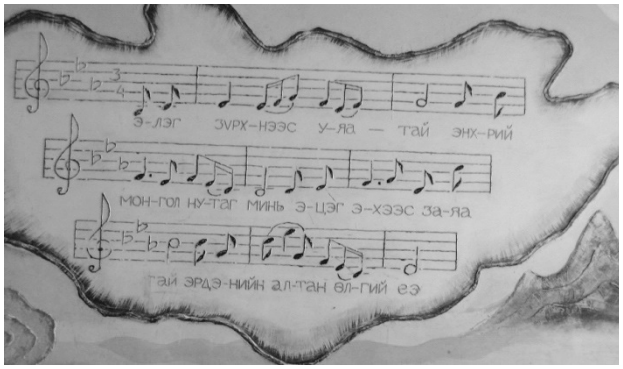


**図 9. 音楽室入口に掲示されている モンゴル民謡の楽譜**

**図10. 鑑賞と表現の授業（身体表現）**

る（図11）内容。

図12は５年生の音楽の授業。西洋音楽の音階（ドレミファソラシド）の導入部分。授業が行われている教室には５線の黒板がないため，教諭が自らの手を使い指を５線に見立てて音符の位置を教えている。

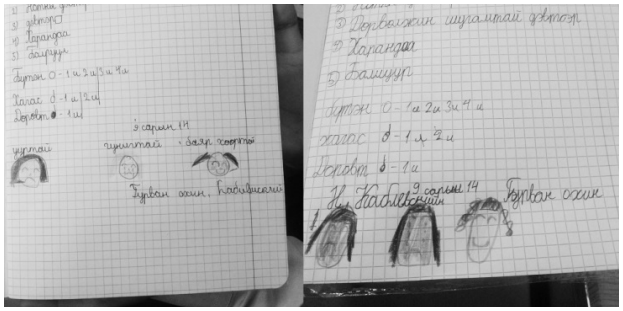

**図11. 鑑賞と表現（絵で表現）**

**図12. 西洋音階導入の授業**

同校には部活動として民族音楽，民族芸能をやる部がある（図13〜15）。音楽室の隣にステージ付の練習場がある。かってはリコーダーアンサンブルの部もあったそうであり，授業以外での音楽活動もさかんな学校である。

**図13. 部活動の子供たちによる馬頭琴の演奏**

**図14. 部活動の子供たちによる民族舞踊**

**図15. 民族楽器のリンベ（横笛）を演奏する生徒**

## ４．考　察

### （1）社会的背景から

1992年にモンゴル人民共和国から現在のモンゴル国になって以来（ソ連支配からの独立以後），モンゴル国は社会主義を捨て資本主義への道を歩み出した。しかし実際のところは，今回訪問したドルノド県チョイバルサン市のように首都ウランバートルよりロシアとのつながりの方が強い地域やモンゴル国の公用語であるモンゴル語が通じない地域があったりする[*4]。

### (2) 現在のモンゴル国における教育方針

このため現在のモンゴル国の教育科学省は「正しいモンゴルの子供プログラムの実施」を基本方針に掲げ，義務教育期間を12年間（高等学校まで）とし，義務教育期間中の授業料は私立学校を除き国の負担としている。

### (3) 音楽の授業における民族音楽的素材

学校における音楽の授業では，1〜4 年生においてはモンゴル民謡・童謡が取り扱われる比率が高く，5〜6 年生で西洋音楽の楽譜の基礎が入り，完全に西洋音楽が入ってくるのは 7 年生（中学 1 年生に相当）からなのも，上記のような「正しいモンゴルの子供プログラム」による自国・自民族の伝統・文化尊重の基本方針からくるものと思われる。

## 5．結語として

日本の学校教育においては，平成20年の教育基本法改正時に「伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに 」（以下略）という一文が入り，学習指導要領の「音楽」においても日本の伝統音楽に関する内容が多くなってきた。

この辺の事情がモンゴルと日本の学校教育には類似点が多々ある。モンゴル国は経済や科学技術においては日本からみれば発展途上国であるが，自国の伝統音楽を学校教育の「音楽」に採り入れるという点では，我が国の学校音楽教育がモンゴル国のそれから学ぶべき点は多々ある，と考える。

## 6. 本研究の今後の課題

2014年と2016年，2 度の調査行でモンゴル国の首都とその郊外，東部の都市の学校における音楽教育についての情報資料収集はできた。今後は南部のゴビ県，西部のバヤン・ウルギー県の学校における音楽教育についての情報，資料収集を行なうことが必要である。

また民族音楽的素材の教材化プロセスを知るために，授業方法だけでなく，モンゴルの民族音楽自体についての研究も課題となる。

## 7. 謝　辞

今回（2016年）の調査にあたり，授業の参観，ビデオ収録に快諾をいただいたドルノド県第12学校のオユンビレグ教諭，ウランバートル第28学校のオルントヤ教諭，ウルチーホ教諭，モンゴル民族音楽についてご指導いただいたモンゴル国立芸術文化大学のザグダ教授，チョドンチュチュ教授，アルタンジャガル教授には多大な協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

## 8. 参考文献・参考 Web サイト

1）井場麻美（2016）モンゴルの教育事情について〜国際スタンダードとの一致〜（留学交流，2016年 4 月号：17–20頁）
2）仲律子（2001）モンゴルが抱える教育課題〜経済的問題を主軸として〜（名古屋大学，教育発達科学研究科，Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University（Psychology and Human Development Sciences）Vol.48：9–15頁）
3）石井哲夫（2015）モンゴル国小学校における音楽の授業（富山大学人間発達科学部紀要第 9 巻第 2 号：147–149頁
4）外務省：諸外国・地域の学校情報
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC12000.html
5）外務省：国・地域（モンゴル）
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/data.html

**（注）**

(*1）前回の調査（石井，前掲書）で赴いた 2 校はいずれもトブ県（中央県）にある。トブ県は首都ウランバートルを囲むように位置するが，行政上，首都ウランバートル市はトブ県からは独立した扱いになっており，トブ県ズンモド町の学校の例をもってモンゴル国の都市部の学校における例とすることには問題がある。

(*2）2016年 9 月5〜18日

(*3）チョイバルサンの鉄道の駅からは現時点ではロシアに通じる鉄路はあるもののウランバートルとはつながっていない（計画はある）。

（*4）現在のモンゴル国では，カザフスタン共和国に隣接しカザフ人の人口が多いバヤン・ウルギー県ではカザフ語による教育が認められている。
また都市部への人口の一局集中により，都市部とそれ以外の地域での経済，情報量の差が大きく，それらは貧富の差，学校の教育水準の差となって顕れる。また旧ソビエト連邦から独立したがゆえに国の経済が低迷化し，義務教育期間中であるにも関わらず家計を助けるために就労しなくてはならない子供たちも多く，教育問題となっている。
さらに旧ソ連支配だった時代には10年制だった義務教育期間を，現在は諸外国に合わせて12年間としたため，学校の校舎の建設が追いつかず，1つの校舎を複数種の学校で共有したり，午前・午後の2部制（学校によっては3部制）をとらざるを得ず，子供たちが教育施設を充分に使えないなどの問題も発生している。

（2017年1月17日受付）
（2017年3月9日受理）